

★★

巻頭言

篠田憲明 (元時事通信政治部)

＝乱立の都知事選に突入＝

★★

今国会の焦点だった自民党の政治資金規正法の改正案が19日、参院で成立、これを受けて野党側は20日、岸田内閣不信任案を提出したが、自民、公明与党の反対で否決した。今通常国会は、これにより衆院解散もなく23日閉会される。しかし、6月のマスコミ各社の内閣支持率は軒並み20%を割り込み、遂に10%台に落ち込んだ。今月の時事通信社の内閣支持率調査は16.4%で、2012年に自民党が政権復帰して以来最悪を記録した。同時に興味深いのは、「自公両党による政権継続」を望む人々より、「自公以外の政党による連立政権を望む」の方が連続して、半数近くいることが明らかになったことであろう。こうした傾向は他の各社も同様の傾向だが、同時に20日、東京都知事選挙が告示され、7月7日の投票日に向けて“七夕選挙”がスタートした。ただ、都知事選への立候補者が56人にも史上最多に達し「掲示板枠48」を超えた。超えた候補者には、都選管は掲示板を作り直さずに、自力で張るようクリアファイルを配って対応したほどだという。主な候補者としては、現職の小池百合子氏のほかには、蓮舫・民主党元代表代行、無所属の石丸伸二氏(前広島県安芸高田市市長)、田母神俊雄氏(元航空幕僚長)、タレントで諸派の清水国明氏、ドクター中松氏らが立候補。こうした乱立と自民党の“ステルス支持”が思わぬ結果を招く恐れがある。

また、20日の「岸田首相不信任案」審議前に行われた通常の代議士会で茂木幹事長に近い中堅議員から「岸田総裁は来て挨拶すべきだろう、(皆さんの)ご苦勞をねぎらいたいとの思いを発するべきではないか」と首相批判を展開、出席者の拍手を浴びたという。漸く身内の中堅・若手からの批判が表面化したが、果たして岸田首相に届いているのか。こうした現象はなかっただけに、岸田総裁と麻生太郎副総裁、茂木敏充幹事長の間に隙間風が吹き始めており、いよいよ政局の季節到来かと注目される。

岸田首相は9月の自民党総裁選に出るつもりのようなのだが、読売新聞などの調査によると、今秋の総裁選では、相変わらず“小石河”と言われる候補が「ふさわしい総裁」のトップ3。つまり、石破茂元幹事長がトップで、小泉進次郎元環境相、河野太郎デジタル担当相と続くが、各社ともいつもほぼ同じ順位・水準で変

わらない。岸田首相は菅前首相と同レベルで冴えない。各社の首相支持率が20%未満に下落しており、「次期総裁にふさわしくない」と言われているに等しい。しかし、本来、“本命視”されてよいはずの茂木敏充幹事長が台頭する兆しが全くないだけに、「嫌な話は岸田首相にやってもらおう」気持ちのようだが、それより都知事選で小池百合子氏が3選を果たせば、岸田首相が“破れかぶれ解散・総選挙”に打って出ないとも限らず、言わば「四面楚歌」の状態が見えていないのか。憲記

★★

勝池レポート      アジア資産運用アドバイザー   勝池和夫  
「インド総選挙の結果と経済」

★★

6月4日に開票されたインドの総選挙では、与党連合は過半数を確保したものの、その中軸であるモディ首相率いるインド人民党は大幅に議席を減らしました。多くのメディアは、低所得者層の不満やモディ首相の強権的な政権運営への反発が、予想外な結果をもたらしたと報じています。更に、「モディ首相の求心力は低下している」「モディのカリスマは陰った」「インドの8%成長計画は危機にある」などと、この時とばかりに一斉に騒ぎたてています。

しかし、よく考えてみて下さい。

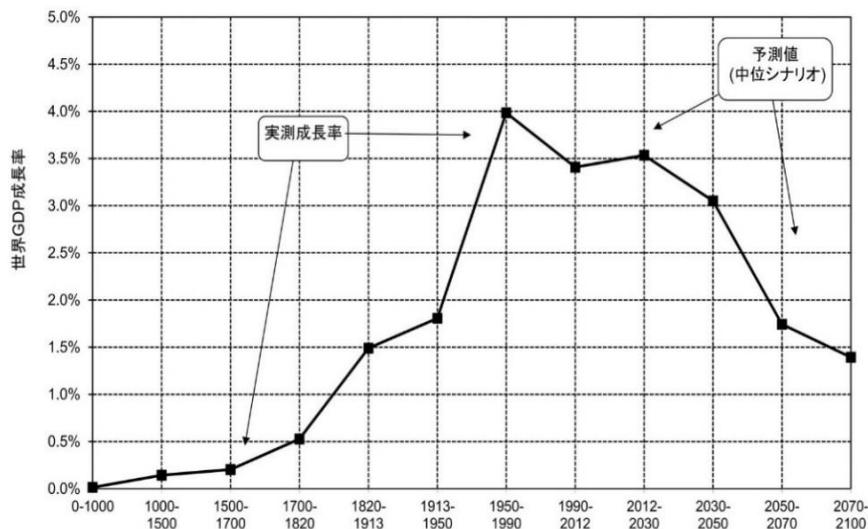
世界の政治家の中に、求心力が上がっている、もしくは支持率が高く安定しているリーダーなど昨今いるのでしょうか。その反対のケースがほとんどではないのでしょうか。

モディ政権には、今回の選挙結果は確かに痛手だったと思います。しかし、逆にインドの民主主義がしっかりと機能していることが、世界に印象付けられたとも言えます。モディ首相も3期目は政策の中心をより民衆の期待に沿うように軌道修正するはずです。彼はそう簡単にはへこたれない人物です。むしろこれを機会に、彼の求心力は独立100周年の2047年に向けて再び上昇すると予想しています。

ユーラシア・グループのイアン・ブレマー社長も、「今度のインド総選挙は抑制と均衡が作用して、インド国民には結果的に良い展開になるだろう」と指摘しています。私もこの意見に同意します。

また、経済に関して言えば、世界の何処の国がこれから経済を長期的に年平均8%以上で成長させることができるのでしょうか。以下のグラフを見てください。

図2.5 世界産出増加率 太古から2100年



これは、トマ・ピケティの『21世紀の資本』（みすず書房）にあったグラフです。古代から2100年までの世界のGDP成長率の変化を示しています。

ご覧のように、世界のGDP成長率は1950年から1990年にかけて約4%でピークを打っています。そして、現在は人類史上で初めての下降局面にあります。10年後には3%するすれになり、それから2100年にかけてだんだんと1.5%程度まで低下していくと予想されています。

私たちの大半は世界経済が最も高い成長を遂げていた時代に生まれ育っています。ですので、成長というのは最低でも3~4%だという意識かも知れません。しかし、「私たちが一般に有する成長のイメージは幻想に過ぎない」とピケティは言っています。

そのピケティの見解を『ビジネスの未来』（プレジデント社）で紹介している作家の山口周氏はビジネスの歴史的使命について、「経済とテクノロジーの力によって物質的貧困を社会からなくすというミッションはすでに終了している」と述べています。

これらの見方が正しいとすると、全世界の株をインデックスで丸ごと買うような投資手法は、これからは余り有効ではなくなりそうですね。一人勝ちだと持て囃されているアメリカ経済でさえ、この先2%を超える成長は難しいでしょう。新NISAではアメリカ株が人気ですが、そんなに期待が持てるのでしょうか。

日本経済の先行きはもっと楽観できません。出生率が昨年1.20と過去最低を更新しましたね。もはや、国の経済の成長どころか国の存続が危ぶまれる状態です。34年ぶりの新高値だとはしゃいだ日本株のこのところのもたつきの裏には、日本の人口動態という極めて基本的な経済基盤の弱さがあるような気がします。

その基盤に日本周辺での地政学的なリスクがのしかかり、おまけに今まで日本を守ってくれていた国の、これからの経済力や軍事力の陰りを想像すると、と

でも日本株が長期で安心できる投資先だとは思えなくなります。

そこで浮かび上がってくるのがインドなのです。このように先進国を中心に減速が予想される世界経済の中で、インドは人口、テクノロジー、民主主義という強固な経済の成長基盤を備えています。農村部にはいまだに物質的な貧困が存在します。これからのインドには、その解消と豊富な人材による AI 革命により、つまり世界に追いついてゆく力と世界を飛び越えてゆく力の『二刀流』で、8~10%の経済成長率を達成する可能性が十分にあると思っています。

今回の総選挙の結果を受けて、私はインド経済と株式市場への自信を一層深めました。

★★

### ムッシュ望月の今月の相場展望と映画紹介

#### 映画は世につれ、世は映画につれ、世相を反映するのが相場

★★

#### 7月の相場展望：

相場格言には、「節分天井、彼岸底」、「七夕天井、天神底（7月25日前後）」等がある。今年の東京市場を見る限り、真逆に動いている。日経平均株価は3月22日に41087円で天井を打ち、4月19日に36733円の安値を付け反発に転じている。ここで大事なことは相場格言の「半値戻しは全値」があり、下落幅は4354円、下落率は10.1%（10%は調整の範囲）で、戻り高値は5月20日に39437円を付け、半値戻しを達成した。この動きから判断できることは、相場の上昇トレンドは崩れていない。更に、その後の安値は5月30日の37617円、6月17日の37950円と下値の堅さを見せている。この間に、2024年3月期の決算を織り込み、2025年3月期の企業予想2%程度の増益を織り込んだ。2%程度という失望感はあるものの、日銀の金融政策（金利引き上げのタイミング）により円安のピークが見えないことから企業が保守的な見通しを立てていることが読み取れる。企業の為替予想の平均が144円ということにも表れている。政治面では岸田内閣の低支持率が続き、不安定な状態で、9月末までの自民党総裁の任期も心配されている。国民の関心は政治資金問題から、東京都知事選（投票日は7月7日の七夕選挙）に移っている。話題は、小池百合子氏、蓮舫氏の戦いに移っているが、若手政治家（元広島県安芸高田市市長、石丸伸二41歳）への期待も高い、18日の政見放送はYou Tubeを通じて異例の11時間超に及んでいる。この動きは、2008年に大阪府知事、2011年に大阪市長になった橋下徹氏を想起させる。「年寄りによる年寄りのための政治」からの脱却の絶好の機会が来たといえる。これに若者たちがどのように反応するかが、日本の将来を占う上で非常に大切である。今年の初めから新NISAが始まり、日本の証券市場が様変わりした。

多くの将来を不安視する若者たちが一気に参入してきた。多分年配層は、昔ながらの銘柄、NTT、トヨタ、JT、三菱UFJに投資、若手層の人気はなんとエヌビディアや積極運用型の海外投資信託である。この海外型の投信の動きにより、為替市場も予想外の展開で、1~5月の間だけでも5兆円超えの資金が米国に流れ、円安に繋がっている。米国市場の半導体関連銘柄（マイクロソフト、アーム、アップル、テスラ等）、国内の半導体関連にも注目が集まってはいるが、米国ほどの動きにはつながっていない。（半導体製造装置絡みに限定）。िकासで注目しているインド市場は、6月4日の選挙の結果を受け一時急落した。「モディ首相の求心力低下」「モディ首相のカリスマ性に陰り」「インドの8%成長の危機」が要因であった。しかし、株価は選挙前の19日現在高値を更新している。英国では7月4日、フランスでは6月30日が第1回投票、7月7日が決選投票と各国が政治の混乱による総選挙になっている。日本も同様に夜明け前が暗いと考えたい。

#### 今月の映画：「関心領域」

5月は、「異人たち」、「無名」「あまろっく」「青春18×2」「鬼平犯科帳」「猿の惑星」「福山健二のラストターン」「ミシング」の8作品を観、累計では53作品となった。年間120本のペースはまだ守られている。6月の紹介映画は第96回アカデミー賞国際長編映画賞・音響賞を受賞した「関心領域」です。同作品は、カンヌ国際映画祭でもグランプリを受賞している。同作品は、マーティン・エイミスの同名小説で、「アンダー・ザ・スキン種の捕食」で映画ファンをうならせた英国の奇才ジョナサン・クレイザー監督が映画化したもの。この作品の舞台は、1945年当時のアウシュビッツ収容所ある街で、壁を隔てて生活する家族の物語である。壁の内側はでは、大きな建物から黒い煙が上がっている。同じように空は青いが、外側では誰もが笑顔で、子供たちの楽しげな声が聞こえる。この家族の交わす何気ない会話や視線では、壁の内側の世界をうかがうことは出来ない。私の中で感じるのは、恐怖でもなく、不安でもなく、自分の第三者的立場の無関心さである。壁の内側と外側の世界にはどんな違いがあるの？平和に暮らす家族と収容所の中でおびえる家族にはどんな違いがあるの？自分と彼らの違いは何か、問いかけてくる。淡々として日常は進むが、内容からすればホラー映画と言えるかもしれない。

純記、望月純夫



NPO イカス：東京都港区新橋 3-16-12 横山ビル 6F

[info@npo-icas.com](mailto:info@npo-icas.com) <http://www.npo-icas.com>

外国特派員協会、参加費 12000 円、事前振り込み：11000 円

会費振込先：三菱 UFJ 銀行新宿中央支店、普通：5 3 1 3 5 5 0